

## 献 辞

専修大学創立140周年にあたる2020（令和2）年4月に商学部が神田神保町に移転した時期は、同時に、世界がいわゆる新型コロナ禍に見舞われ始めた時期でもありました。約百年ぶりに人類が経験した世界レベルのパンデミックは、わが国の学校教育にも大きな影響を及ぼし、オンライン授業というものが一般化してきました。また授業のみならず、教授会をはじめとする諸会議もオンライン開催がほとんどとなっております。このような状況も4年目が終わろうとしており、大学では90%以上の講義が対面開講に戻るなど、ようやく学校そして世の中が正常化しつつあるようです。しかし、コロナ以前に戻ったこともあれば、コロナの時期に新たに始められたことがそのまま続けられていることもあり、少なくともコロナ前と同じではないことが感じられます。これがポスト・コロナのあるべき姿なのかどうか、誰も正解がわからないという意味では混迷の時代がいまだに続いているといえるのかもしれません。

商学部は、ここに至るまで、2015（平成27）年度には、1905（明治38）年の現神田校舎の地での商科の創設から数えて商学教育110年、1965（昭和40）年の学部創設から数えて50周年を、2018（平成30）年度には、会計教育100周年、会計学科50周年の節目を刻んできました。こうした商学部が新たな世紀あるいは半世紀を迎える大切な時期をともに歩むとともに、ご経歴の最晩期において、誰も経験をしたことのない取り組みに挑んでくださった大林守教授、梶田龍三教授、小藤康夫教授、田中和雄教授、柳裕治教授の5名という多数の先生方が2023年度をもって本学を定年退職されることとなりました。

大林守教授は、1976（昭和51）年3月に国際基督教大学教養学部をご卒業後、1978（昭和53）年3月に同大学行政大学院修士課程を修了され、1982（昭和57）年9月にブリティッシュ・コロンビア大学大学院経済学博士課程を単位取得退学された後、経済企画庁経済研究所客員研究員、（財）国民経済研究協会研究員、東海大学非常勤講師、（財）電力中央研究所経済研究所主査研究員を経て、1988（昭和63）年4月、専修大学商学部助教授に就任されました。そして1997（平成9）年4月に教授に昇格されました。学内での主要な役職としては、国際交流センター委員会委員、同運営委員会委員をお務めいただいた後、国際交流センター長を14年の長きにわたってお務めいただきました。また他にも、自己点検・評価委員会委員、情報科学センター運営委員会委員など要職を歴任されました。加えて2013（平成25）年12月からは専修大学評議員もお務めいただいております。主要な担当科目としては、マクロ経済学、現代経済基礎、現代経済のトピックス、ゲーム理論などがあげられます。先生のご研究の専攻分野は経済統計および理論経済学、殊に計量経済学であり、この分野で多数の著書・論文を公表されるとともに、近年ではご担当講義で実践されているオンライン教育によるアクティブ・ラーニングの教育効果についても経済統計の手法を応用してご研究の対象とされております。

大林先生は、教授会において物事の本質を突いた鋭いご質問・ご意見を述べられ、小職にとって入職当初は「怖い先輩」でした。しかし、その後間もなく、学部の自己点検・評価委員会で一緒にさせていただき、先生のフランクなお人柄が感じられ、当初の印象は「出来る先輩」に代わっておりました。

梶田龍三教授は、1976（昭和51）年3月に福岡大学商学部をご卒業後、1978（昭和53）年3月に同大学大学院商学研究科博士前期課程を修了され、1981（昭和56）年3月、同大学大学院商学研究科博士後期課程を単

位取得退学された後、九州産業大学非常勤講師、日本文理大学講師、助教授、大分大学助教授、教授を経て、2013（平成25）年4月、専修大学商学部教授に就任されました。学内での主要な役職としては、本誌『専修商学論集』の編集委員を長年にわたりお務めいただきました。主要な担当科目としては、国際会計論、会計基準論、簿記論Ⅲなどがあげられます。先生のご研究の専攻分野は財務会計論であり、特に米国会計基準あるいは財務会計の基礎的概念に関する数多くの著書・論文を公表されております。

栢田先生は本当に明るいご性格で、小職自身も所属する会計系列のムードメーカーのような役割を果たしてくださいました。またその研究活動に対する真摯かつ情熱的な取り組み姿勢からは、多くの貴重なご示唆を賜ることができました。

小藤康夫教授は、1976（昭和51）年3月に明治大学商学部をご卒業後、1978（昭和53）年3月に一橋大学大学院商学研究科修士課程を修了され、1981（昭和56）年3月、同大学大学院商学研究科博士課程を単位取得退学された後、弘前大学専任講師を経て、1984（昭和59）年4月、専修大学商学部講師に就任されました。そして1985（昭和60）年4月に助教授に昇格され、1991（平成3）年4月に教授に昇格されました。学内での主要な役職としては、入学試験委員会委員長、自己点検・評価委員会委員長、出版企画委員会委員長など要職を歴任されました。主要な担当科目としては、金融論、金融サービス、金融システムなどがあげられます。先生のご研究の専攻分野は金融論および財政学であり、この分野で多数の著書・論文を公表されるとともに、近年では国内外の大学の財務状況に注目したご研究に注力されております。

小藤先生はいつも温和な笑みをたたえられ、生田にいた頃には教職員食堂でしばしばお昼をご一緒させていただきました。お話をさせていただくと豊富な話題をお持ちで、そこから数々のご教示を賜ることができました。

田中和雄教授は、1976（昭和51）年3月に中央大学商学部をご卒業後、1981（昭和56）年3月に同大学大学院商学研究科修士課程を修了され、1988（昭和63）年3月、同大学大学院商学研究科博士課程を単位取得退学された後、大阪市立大学助手、専任講師、助教授、同大学大学院経営学研究科および商学部助教授などをを経て、2003（平成15）年4月、専修大学商学部助教授に就任されました。そして2004（平成16）年4月に教授に昇格されました。学内での主要な役職としては、学生部委員、二部学生部次長、入学試験委員会委員など要職を歴任されました。主要な担当科目としては、人的資源Ⅰ・Ⅱ、ビジネス基礎などがあげられます。先生のご研究の専攻分野は人的資源および経営学であり、殊に労務あるいは人的資源管理に関する多数の著書・論文を公表されています。

田中先生は穏やかでお人柄で、しかし物事に対してはいつも正面から真面目かつ完璧に取り組まれておりました。入試の面接でご一緒させていただいた折に、つついとおざなりで済まそうとした小職が作成した評価報告書を丁寧にご修正いただいたことが反省とともに懐かしく思い出されます。

柳裕治教授は、1976（昭和51）年3月に専修大学商学部をご卒業後、1978（昭和53）年3月に同大学大学院商学研究科修士課程を修了され、1981（昭和56）年3月、同大学大学院商学研究科博士課程を単位取得退学されました。その後、1981（昭和56）年4月、専修大学商学部助手に就任され、1983（昭和58）年4月講師、1986（昭和61）年助教授に昇格されたのをを経て、1992（平成4）年4月に教授に昇格されました。学内での主要な役職としては、会計学研究所長および所長代行、購買会連絡協議会委員長、入学試験委員会委員など要職を歴任されました。主要担当科目としては、学部での税法、税務会計論などがあげられる他、大学院商学研究科における税法関連講義・ゼミナールから数多くの税理士資格取得者を輩出されました。先生のご研究の専攻分野は税法および税務会計論であり、この分野で多数の著書・論文を公表されるとともに、それらは学界において高く評価されております。

柳先生は厳しさと大きな包容力を同時におもちで、そういったご性格を大学そして大学院教育においてい  
かんなく発揮されたことは、柳ゼミ OB 会の結束力の強さから十分に窺い知ることができます。

大林先生、栢田先生、小藤先生、田中先生、柳先生は、長年にわたり専修大学にお勤めになり、いよいよ  
定年退職を迎えられます。商学部神田移転という大きな区切りの時期に加えてコロナ禍という、専修大学の  
教職員・学生、誰もが経験したことがなかった困難な状況を乗り越えようと、ともに取り組んできた記憶は  
学部構成員の心の中に深く刻まれております。神田移転に伴い新たな姿を求めてきた商学部もこの4月には5  
年目を迎えます。新商学部はまだまだ未完成であり、また完成することはないのかもしれませんが、常に前  
に向かって進みたいと考えております。これからもそうした後進の私たちの姿を見守り続けていただき、叱  
咤激励してくださいますようお願い申し上げます。

2024年1月吉日

商学部長 石原 裕也